

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会

力強き愛

——詩篇第86篇——

1992年1月5日

小池辰雄

わが靈魂を守りたまえ 汝の中に信賴する 力強い愛 断定の告白 絶対他力 使命感 天道
地路 信実 愛と信実 キリストの徴 力強き愛の人

【詩篇86】ダビデの祈り

1 エホバよなんじ耳をかたむけて我にこたえたまえ。

我はくるしみかつ乏しければなり。

2 ねがわくはわが靈魂をまもりたまえ。

われ神をうやまう者なればなり。

わが神よなんじに依頼める汝のしもべを救い給え。

3 主よわれを憐みたまえ。

われ終日なんじによぼう。

4 なんじの僕のたましひを悦ばせたまえ。

5 主よなんじは恵みふかくまた赦をこのみたもう。

汝によぼう凡てのものを豊かにあわれみたもう。

6 エホバよわがいのりに耳をかたむけ、

わが懇求の声をききたまえ。

7 われわが患難の日になんじに呼ばわん。

なんじは我にこたえたもうべし。

8 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく

汝のみわざにひとしきものはなし。

9 主よなんじの造れるもろもろの国は

なんじの前きたりて伏し拝まん。

かれらは聖名をあがむべし。

10 なんじは大いなり。奇しき事跡をなしたもう。

唯なんじのみ神にまします。

11 エホバよなんじの道をわれに教えたまえ。

我なんじの真理をあゆまん。



ねがわくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまえ。

12 主わが神よ我心をつくして汝をほめたたえ、

とこしえに聖名^{みな}をあがめまつらん。

13 そはなんじの憐憫^{あわれみ}はわれに大いなり。

わがたましひを陰府^{よみ}のふかき処より助けいだしたまえり。

14 神よたかぶれるものは我にさからいて起こりたち、

暴^{あら}ぶる人の会^{つどい}はわがたましひをもとめ、

斯^{かく}てなんじを己^{おの}がまえに置かざりき。

15 されど主よなんじは憐憫^{あわれみ}とめぐみとにとみ、

怒りをおそくし愛^{いつく}しみと真実^{まこと}とにゆたかなる神にまします。

16 我をかえりみ我をあわれみたまえ。

ねがわくは汝のしもべに能力^{みちから}を与え、

汝のはしための子をすくいたまえ。

17 我にめぐみの憑據^{しるし}をあらわしたまえ。

然^{さう}ばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん。

そはエホバよなんじ我をたすけ、

我をなぐさめたまえばなり。

●わが靈魂を守りたまえ

明けましておめでとうございます。本年もよろしく。今日は年頭の集会です。毎年、詩篇をやりますが、今日は第86篇です。86篇は私の『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻）には載っていません。新しくお話しします。

「ダビデの祈り」です。「詩篇」の「詩」の字は「祈り」という字で、「テヒラー」、複数「テヒリーム」という。「詩篇」というのは「祈りの書」という意味です。

「エホバよなんじ耳をかたむけて我にこたえたまえ。

我はくるしみかつ乏しければなり。

特に「耳を傾けて」と、原語でも書いてある。

「よく耳を傾けて聞いてください。私は苦しくかつ乏しいから。大分、困っているんです」

と。精神的な苦しみと肉体的な乏しきです。

2 ねがわくはわが靈魂^{たましひ}をまもりたまえ。

「苦しみと乏しきを解いてください」

と、いきなり言わないで、今度は

「わが靈魂をまもりたまえ」



と来た。この2節は非常に大事な事です。「魂を守る」という。何といっても、「魂」は人間の存在の中心ですから。ヘブライ語では「ネフェシュ」という字ですけれども、英語の「ソウル」、ドイツ語の「ゼーレ」にあたる。ちょうど、「心」と「霊」の中間の言葉です。「靈魂」の方ですね。中国語でもやはりそういう言い方をする。

「霊—魂—心」

ということ。魂は

「たましひ」(魂之霊)

と書いてください。これは「魂霊」なんだ。我々の信仰の角度からいうと、

「魂を聖名の故にまもってください」

ということ。あなたの故に——こちらの救いの故ではない——魂を守ってください。お役に立ちたいから、その意味で、魂を守ってくださいと。

魂は、霊、気の世界です。気が病むと病気になる。気が神さまに、キリストにあると

「健気」

なんです。「健康」でない。健気なんていう言葉はないけれども、病気に対しては健気なんだ。この気が強くなるということが、病気を治す一番大事な要素です。いろいろな、第二義、第三義的な薬だとか、いろんなお医者さんのお助けだとか要りますけれども、大事なのは、自分自身の気がめいつていたら、これはダメです。気は一番大事です。これは魂の世界です。霊と気は非常に通じますから。

私は今日は、「力強き愛」と書いた。この力の世界は、気が強くないとね、

「強気」

でない。

● 汝の中に信頼する

われ神をうやまう者なればなり。

ここのとこで今度は、「神よ」といって、「汝よ」と言わないで、三人称的な言い方になっている。「うやまう」とは「信頼する」という意味です。直訳すると、

「私は汝の中に信頼するところの者である」

ということ。

「敬神」

です。神——仏教なら仏——神仏に対する

「畏敬の念」

です。畏敬の念のない民主主義はダメです。だから、日本の民主主義はいつまでたってもダメです。神仏に対する信頼のない、身勝手主義になってしまう。

「民主主義、民主主義」



と言っているけれども、そんな「イズム」ではないんだ。もう、皆さん、そういうことはつきりと言わないといけません。神なき民主主義はダメ。学校の先生自身が、神仏に対する、絶対者に対する畏敬の念がなかったら、本当の教育はできない。

わが神よなんじに依頼よりたのめる汝のしもべを救い給え。

今度は二人称だ。同じことを、今度は、二人称ではつきり言いだした。

●力強い愛

3 主よわれを憐あわれみたまえ。

われ終日ひねもすなんじによぼう。

詩篇の言葉は強いですね、「一日中」という。「魂がよばわる」というのは、なんにも叫ばなかつたていい。神さまとの交通が、ちょうど我々が上を向いて天を仰ぐように、神に向かつていることです。

「あわれみたまえ」で、マタイ伝9章の盲人のところをちよつと思いだす。

「27 イエス此処より進みたもう時、ふたりの盲人めしいさけびて『ダビデの子よ、我らを憫あわれみたまえ』と言いつつ従う。28 イエス家にいたり給いしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言いたもう『我この事をなし得と信するか』彼等いう『主よ、然り』29 ここにイエスかれらの目に触りて言いたもう『なんじらの信仰のごとく汝らに成れ』30 乃ち彼らの目あきたり」(マタイ9・27〜30)

大変なものだね、キリストというひとは。この盲人はもう切実ですよ、目があきたいのは。肉体の欠陥で、目が見えないことが一番痛ましいことです。

「何とかお願いします」

と、全身のお願いだ。そうすると、

「汝らの信仰のごとく汝らに成れ」

とおっしゃった。

さつき讚美歌を歌っていて、312番の「いつくしみふかき」の2節、3節は「祈りに応えて慰めたまわん」ではダメなんだ、「慰めたもう」と歌わないと。「たまわん」というと、これは蓋然性がいぜんになる。

「慰めてくださるでしょう」

ではないんだ。

「慰めてくださいます」

ということですよ。

「祈りに応えてキリストは癒してくださいます」

と直してしまふ。

「労いたわりたまわん」



でなく、

「劳りたもう」

です。そういうように歌わないと、力が来ない。私は聞いていて、「たまわん」なんて歌われてしまうと、力が来ない。まあ、仕方がない。そう書いてあるから、皆さんはそう歌われた。「たもう」と直しておきなさいよ。我々が歌う時には、「たもう」にしなければ。私はいい加減に聞いてないですから。見たり、聞いたりする時には、ちゃんと中身をシッカリしておかないとダメです。魂に響かないと、私はすぐ自分で直してしまう。信仰の世界は現実ですから、

「いずれ治してくださいさるでしょう」

ではないんだ。本当ですよ。それが力強い愛なんです。上からの愛は力強い愛ですから、力が働く。そのようにしてこちらが全的に進んで行かないと、日常生活において力が来ない。何も教会の悪口を言うわけではないけれども、もう、そういった伝統でしょっちゅうやっているから、いつまでたつても始まらないんだよな。

キリストに本当に、

「あわれみたまえ」

と叫ぶ。「あわれみたまえ」というのは情けない言葉ではない。

「あなたの愛をください」

ということです。そしたら、キリストは、彼自身が憫みあわれそのものだから、憫みの愛そのものだから、必ず力が働く。だから、私は今日は特に、「力強き」という言葉を題につけたんです。キリストの愛は「力強き愛」だよ。ちよつと触れたら、盲が治ってしまうんだから。

「お前はこんなに私を信じてくれたか」

ということが、

「汝の信仰なんじを救えり」

ということですよ。

●断定の告白

⁴ なんじの僕のたましひを悦ばせたまえ。

「なんじの僕のたましひは正に悦んでいます」

と。「たまえ」の後は今度は、

「悦んでおります」

という断定の告白になる。旧約はそこがまだもの足りない。新約の世界になると、それが本当の告白になる。詩篇を読んでいて、詩篇には神さまの愛のことを言っているけれども、隣人に対する愛のことはほとんど詩篇の中には積極的な言葉がない。それが旧約のちよつと限界なんだ。敵をやつつけることばかり書いてある。そればかりでもないけれども。ル



ターは詩篇を

「小聖書」

と言つて非常に重んじたけれども、小聖書はむしろイザヤ書です。何といつてもイザヤ書は凄い。イザヤ書の中にはもうはつきりと新約が入っています。

「魂を悦ばせたまえ」

「はい、悦んでおります」

ということ。

やつぱり、ここも欣喜雀躍しているね。盲のところばかり出すけれども。マルコ伝10章46節から52節のところに、

「⁴⁶バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐しおりしが、⁴⁷ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエスよ、我を憐みたまえ』」

と叫んだ。「ダビデの子」とは「メシヤ」「救主」ということです。

⁴⁹イエス立ち止りて『かれを呼べ』と言ひ給えば……、⁵⁰盲人うわぎを脱ぎ捨て、踊り上りて、イエスの許に來りしに、⁵¹イエス答えて言ひ給う『わが汝に何を為さんことを望むか』

キリストは知っているくせに、こういうことを言うんだ。

盲人いう『わが師よ、見えんことなり』⁵²イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』と言ひ給えば、直ちに見ることを得、イエスに従いて途を往けり」

(マルコ10・46〜52)

「ゆけ」という言葉を発した時に、もう、目があいてしまっている。だから、福音書というのは凄いんだよな。

聖書は、福音書を読んでキリストの前に降参してしまわないと、その世界に入れない。分かるの分からないのではない。

「参りました!」

と降参したら、キリストの力がやって来る。

「主よわが靈魂はなんじを仰ぎのぞむ」

と。旧約では、「仰ぎのぞむ」と言う。いいよ、「仰ぎのぞむ」だって。けれども、

「わが魂は汝に踊り込む」

と。この盲人の「踊り上がりて」と同じように、「汝に踊り込みますよ」ということ。

●絶対他力

⁵主よなんじは恵みふかくまた赦をこのみたもう。

汝によぼう凡てのものを豊かにあわれみたもう。

「汝は恵みふかく寛容にして、汝に呼ばわる凡てのものに愛しみ豊かにいま



したもう」

と。大変、素晴らしい言葉だね。旧約で「愛」「いつくしみ」「あわれみ」というのはみんな「ヘセッド」と言う。これは大事な字です。「汝のあわれみ」という言葉は発音も強い。後で、

「あわれみとまこと」

という言い方でも出てきますけれども。

「呼ばれる者に愛は豊かである」

と。「何が豊かだ？」なんて、そう思ってはダメですよ。とにかく、私たちには、旧約を読みながらも、主体はキリストですからね。キリストというひととはあらゆる素晴らしい形容詞で言えるひとだから。愛は強いし、豊かだし、深いし、何と言ってもいい。キリスト自身がそういうひとなんです。だから、

「主さま！」

の一言に、「主よ」の一言の中に、無限な内容が入っているんです。禅宗よりか凄いんだよ、この福音の世界の方が。

手島さんという人は、非常に禅宗の好きな人だった。彼は聖道門だね、そういう性格の男だから。私の方は浄土真宗だ。親鸞の方だ。親鸞の方は絶対他力だから、弱そうで反つてももの凄い強さをもつ。禅宗の方は御苦労さんですと、半分言いたくなる。坐禅を組んで一生懸命やっているのは。そんなものはいらない。あるがままが本当の坐禅になる。浄土真宗がキリストの世界です。あるがままの単純な心が「幼児」ということ。

「幼児にならずば天国に入れない」

というのはそのことです。

6 エホバよわがいのりに耳をかたむけ、

わが懇求ねがいの声をききたまえ。

7 われわが患難なやみの日になんじに呼ばわん。

なんじは我にこたえたもうべし。

「汝は我にこたえたまえばなり」

と、これははつきり言っているね。「そは汝は我にこたえたもう」と。

●使命感

8 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく

汝のみわざにひとしきものはなし。

これは、出エジプトやなんかを考えているんでしょう。もの凄い力をもつてなされた、あなたみたいな神さまは他にありませんよと。

「もろもろの神のうちに」

と言うんだから、他の民族の神々はみんな認めているわけだ。そんなものは比較にならない



いと言う。それはいいけれども、ユダヤ人がまた

「ユダヤ教でなければ、旧約でなければダメだ」

と言って、他に対して排他的になったら、これは間違いです。もう、イザヤになると全世界の神ですから、排他的な比較の世界ではなくなってしまう。

今、大分、民族独立の声が高い。ソ連は近頃、「ロシア」と言いだした。ソ連がまたロシアに戻った。ところが今度は独立連合体のロシアになって、たくさん民族がいるから、民族自決とか言いだす。その民族主義は民族主義でいい。もうひとつ言うと種族もある。大和民族とか。けれども、ヨーロッパなんていうのは、民族なんていつたつて、随分血が混じっている。とにかく、一応、民族はたくさんある。これを絶対化するから喧嘩になる。

民族主義というのは使命感をもたなければダメです。ところが、一般の人はこの使命感を持たない。いわゆる「愛国」になってしまう。自己中心の愛国なんていうのは本当の愛国でない。これは、内村先生も言っているとおります。

「使命感」とは何ですか。絶対者から託されている特別な姿を、中身を持っている。大和民族も、ドイツも、イギリスも、みんなそれぞれの特殊性を持っている。民族は特殊的存在です。国家にしても同じことだ。独立は結構なんだが、その垣根は在れども無きが如きものでなければダメなんです。全部、融合する。それは使命感を持っているから。

「ああ、そうか。あなたの方はそういう事をするのか。私の方はこうなんだ」

と。それぞれの使命があつて、それが本当の独立協共同体だ。この「協同」がなかったらダメなんだ。ロシア自身が独立協共同体であるならば、世界そのものも、アメリカも日本も、みんな独立協共同体です。独立はそれぞれ尊重する。しかし、お互いに連係していきましよう。それは使命があるから。それぞれ使命を持っているからだ。その使命感がないと、この協同体の意味が分からない。何が協同体かと。助け合い運動でも、その協同体から出てくる。使命感から助け合いも出てくる。

「プラスとマイナス。そちらがやれば、またこちらもやるよ」

と。そういうのならば、民族主義は結構です。「民族主義」という、いわゆる主義に固まったらダメです。

日本はどういう使命をもつて世界に貢献するか。

「ジャパン フォア ザ ワールド」(Japan for the World)

というのがこの使命感なんです。内村先生の有名な言葉だ。

「私は日本のため、

日本は世界のため、

世界はキリストのため、

すべては神のため」

という。内村先生のあの言葉は素晴らしい使命感をもった永遠の真理です。



●天道地路

だから、根源に本当の意味の福音をもたないと、ものの本当の判断ができないんです。

「キリスト教に入ると何か狭くなる」

なんて、冗談言うなど。本当の大構造が見えてくる。だから、福音は凄いんだ。「教え」ではない。本当の道なんだ、本当の天道だ。

「天道地路」

でいくんだ。全世界の神さまだ、そんな比較なんか要らないということです。

9 主よなんじの造れるもろもろの国は

なんじの前にきたりて伏し拝まん。

かれらは聖名をあがむべし。

それはいいよ、そこまでいけば。

「あなたはどの国民もお造りになった」

と。国も神のもの、土地も神のもの。全部、「神有」だ。みんな神の有^{もの}という神有を忘れてる。私有、公有、国有そして神有。神さまのものをお預かりしているから、また神さまに返す。

日本は土地問題で大騒ぎしている。すべての関係が狂ってきた。もう、サラリーマンは東京では住めなくなつて、新しい家なんてとても建てられない。遠くに行つて遠くから通うと、また、これが疲れてしまつてどうにもならん。マイナスの何乗かになっている。こういうことを裁断できないような政治だから困つたもんだ。原因は何かというと、結局そこに帰する。大政治家は大宗教家でなければダメなんです。

「宗教と政治とは別問題だ」

なんて、別問題じゃない。

「宗教と政治とは次元が違つて、宗教が根底になればダメだ」と言うんだ。私ははつきりと詩に書きますから。

10 なんじは大いなり。奇^{くす}しき事跡^{みわざ}をなしたもう。

唯なんじのみ神にまします。

11 エホバよなんじの道をわれに教えたまえ。

我^{まこと}なんじの真理^{まこと}をあゆまん。

ねがわくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまえ。

「道を教えたまえ」とあるが、私は「教える」という言葉はあまり好きでない。私は皆さんに何も教えてなんかいない。告白^{くわんめい}しているだけだ。「教師」なんていうのはよくない。「キリスト教」じゃないんだ。

「なんじの道をわれに示したまえ」

だよ。まあ、仕方がない。「教え」だつて悪くはないけれども、



「観念的になつたらダメだ」
ということです。

●信実

我なんじの真理まことをあゆまん。

「まこと」という字はヘブライ語で「エメツ」という字が使つてある。「アーメン」という字から来る言葉です。英語では

「アイ ウイル ウォーク イン ユア トウルース」

と訳してあるけれども、この「アイ ウイル」は強いんです。「真理」と言うと、これは観念的に響いて困るんだ。これは「信実」です。

「あなたの信実の中を歩いて行きます」

ということ。主体は「あなた」の方です。

「あなたは、私がどうであろうと、私を決して裏切らない方である。どこまでも尽くしてください。そのあなたの信実まことの中に、信実まことの力の中で歩いていきます」

と。「汝のまことに歩まん」と。

「信実の中にあなたの信実をもつて歩きます。信実をいただいて歩きます。信実と一つになつて歩きます」

ということですよ。

ねがわくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまえ。

「心ひとつに」というのは「私の心のすべてをもつて」ということ。

「私の心のすべてをもつて、聖名をおそれしめたまえ」

全心です。「全心をもつて」、あるいは「心を尽くして」とも訳します。

¹²主わが神よ我心をつくして汝をほめたたえ、

とこしえに聖名みなをあがめまつらん。

「心をつくして」と、これが

「心ひとつに」

と同じこと。聖名が大事なんです。「名前」という字はヘブライ語で「シエーム」という字で、あなたの「聖名あがを崇める」というのは

「栄光を帰する」

という字です。聖名を栄光づけるということ。永遠にいつまでもと。

¹³そはなんじの憐憫あわれみはわれに大いなり。

わがたましひを陰府よみのふかき処より助けいだしたまえり。

これは非常に大事な節だね。旧約を突き抜けた言葉だ。旧約の世界は陰府の世界だけれども、「陰府よみから助けだしてくれた」



というんだから。死の世界から生命の世界に入れてくれた。旧約の世界では、死んだ後は非常に暗い。それを天国的にグッと明るくしたのは新約です。13節は非常に力強い内容ですね。ヘブライ語では陰府のことを「シェオール」という。「シェオール」の中から、深い陰府の中から、助けいだしてくださった。神さまのつつ組みで、非常に素晴らしい現実に入れられたと言う。

14 神よたかぶれるものは我にさからいて起こりたち、

暴ぶる人の会はわがたましひをもとめ、

斯てなんじを己がまえに置かざりき。

そういう悪い奴にやつつけられそうになったと。

15 されど主よなんじは憐憫とめぐみにとみ、

怒りをおそくし愛しみと真実とにゆたかなる神にまします。

「ちよつと私もうまくなかったけれども、あなたは怒らなかった」

と、感謝しているわけだ。

●愛と信実

「愛と信実」ということ。「エメツ」という字は「信実」という字だ。私は「まこと」は

「信実」

が一番合うと思う。「真実」という「真」の字を書いてはダメなんです。藤井武先生はこの「真実」が好きだったけれども。

「真実」をよく、ドイツ語では「ヴァールハイト」とも訳します。「信実」は「ヴァールハフティツヒカイト」と訳す。

「真実」の方は、主観的に自分がまことである、いわゆる「真」であること。これは主観的な世界です。

「信実」というのは、神が主体である世界なんです。神さまが主体である。キリストの信実はこつちを裏切らない。どこまでも罪びとを追求して救おうとしているのが信実です。

「愛と信実とにゆたかなる」

というのはそのことだ。

「愛しみと信実」

要するに、この愛は不変です。「ヘセツド」（愛）と「エメツ」（信）と言う。

「めぐみとまことにて満てり」

と、よく新約でも出ている。あれがこれなんです。旧約のこの言い方から来ている。

科学的な真理、それから、道德の世界でもそうですけれども、「真理」という響きはどうも観念的に響きがちだから困る。そうでなければ、「真理」でもいいんだけど。

「それは間違いがない」



ということは「真理」の世界だから。その「間違いのない」のが、科学的な事であろうと、道徳的な事であろうと、何でもそれはひつくるめれば、全部「真理」になるけれども。そこらのところは、中身をわきまえて使わないといけない。藤井先生は「真理」という言葉が非常に好きでした。

「福音の真理」

なんていう言い方をする。だから、信仰の世界がちよつとこわばるんだな。

¹⁶ 我をかえりみ我をあわれみたまえ。

ねがわくは汝のしもべに能力を^{みちから}与え、

汝のはしための子をすくいたまえ。

「はしための子を」という言い方をしているね。「自分の息子を」と。

「我をあわれみたまえ、聖名の故に」

あなたの愛の目的は、「聖名の故」である。「聖名」というと、何かピンと来ないかも知れませんが、キリスト。「神」という、何でも聖書の言葉は具体的な内容を持たなければダメなんです、観念でないんだから。

¹⁰ あわれみと真実とともにあい、義と平和とたがいに^{くちつけ}接吻せり。¹¹ まことは

地よりはえ、義は天よりみおろせり」(詩篇85・10〜11)

と、詩篇の中にもあるけれども、「義は天より見下ろし」なんていう言い方をしているでしょ。これは具体的なんです。「義が見下ろす」とは、

「義なる神が、愛なるキリストが、義なるキリストが」

と、どこまでも中身が具体的な主体なんです。神・キリストが主なんです。こっち(人間)は客なんだ。こっちは地球で、神・キリストは太陽なんだ。

「心に太陽を持て」(ハープ デイ ゾンネ イム ヘルツェン)

というドイツ語の詩があるけれども、「太陽を持て」ではない、

「太陽となれ、お前自身が太陽となれ」

ということですよ。

そういう意味で、日本の国旗(日の丸)を我々が見なければしょうがない。世界で最高の国旗ですよ。太陽が無くなったら、すべてダメになってしまうんだから。日本の国旗は何と言ったって、ケタ違いに素晴らしい国旗です。その国旗を重んじないから、日本人は困ったものだ。

我々自身が太陽になる。キリストがわが太陽だから、

「太陽も要らない」

と黙示録に書いてある。

「神とキリストが太陽である」

と書いてある。



「愛^{いつく}しみと信^{まこと}実に」

これが、新約聖書に出てくる言葉の

「恵みとまことに満つる」

というのは正にこれなんです。

●キリストの徴

17 我にめぐみの憑^{しるし}據をあらわしたまえ。

然^さばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん。

そはエホバよなんじ我をたすけ、

我をなぐさめたまえばなり。

素晴らしくくりだね。初めて、「慰める」という言葉が出てきた。

「我にめぐみのしるしをあらわしたまえ」

と。「恵みのしるし」とは何ですか。

「我にめぐみのしるしが現れています」

でいいじゃないですか。

「神さまの恵^{しるし}みの徴」

は、言うまでもなく、我々にとってはキリストそのものです。我々自身がまた、キリストの徴にならなければダメだ。「恵みの徴」というのは素晴らしい言葉です。「徴」というのは「オーツ」という言葉です。この「めぐみ」という字はこの場合、違った字が使っている。「トーブ」という字がある。「よいかな」というのが「トーブ」という字です。「めぐみ」は「善福、善恵」

——こんな言葉はないけれども——これが「トーブ」という字なんです。直訳すると、

「善福」(トーブ)の為の「徴」(オーツ)

という。「レ」という字が使っている。

「善福のための徴、恵福のための徴、恵みのための徴」

ということ。ということは、恵みの主体が即ち「恵みの為^{ため}」になる。「恵みの徴」でも

いいですけども。

キリストが恵みの徴です。我々自身がキリストの徴になる。

「徴を求める」

というのは、いわゆる徴を求めて、現象的に徴を求めてはダメだけれども、本当の意味では、根源的な意味では、これは全部、徴なんです。

「徴の宗教」

なんだ。「説明」ではない。「告白」の主体が徴なんです。我々は、「キリスト者」というのは



「キリストの徴」

なんだ。我々はキリストの徴です。

我々はキリストの徴を持っている。どういう徴かというと、

「十字架・聖霊」

の徴です。それが徴であるし、我々自身が「十字架・聖霊」の具体的な徴である。これが「恵みの徴」。この「恵みの徴」は力を持っています。これが即ち、「力強き愛」が「恵みの徴」なんです。キリストの力強き愛が「恵みの徴」となるわけです。

●力強き愛の人

我々の愛もセンチメンタルな愛でない。力強い愛でなければダメ。人を本当に助ける力です。

この1992年は、そのような力強き愛の徴として、恵みの徴として、大いに進んで行きたいと思うわけであります。

我々自身が、キリストの力強き愛によって、我々自身が力強き愛の人とならなければ。だから、それが

「即如」

の世界なんです。全部、キリストと一如とならなければ、福音の世界じゃない。いつまでも仰いでいるのでは。「信仰」ではないんだ。

「信交、信行」

なんです。

それこそ、「聖書の真理」を現していく。「理」という言い方があまり好きでないが。聖書の、「真相」

でもいいな。「聖書の真相」がいい。「理」というと何か理屈の世界になってしまう。私の少し思い過ぎかも知れませんが。

「いや、そうじゃありません」

という人はどうぞ使ってくださいよ、何も構わないから。

とにかくもう、表現できない世界ですから、この福音の世界は、あまりに豊かすぎてしまつて。だから、

「愛の広さ、高さ、深さの如何ばかりなるかを」

と、パウロはもう表現できないものだから、あんなことを言っている。では、どうも、ありがとうございました。

